

根^え
源^{げん}
實^み
紫^{むらさき}

上の巻十一

9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8

實紫

孔氏文庫

笠亭仙果作

梅蝶樓國貞畫

泉

喜

太

板

此一篇へ尾張まで草せり田舎人の頑く其といふ朋友の稿本と見て嘲るへ
 授手子ぐ女中調弄るへ妹背山の御殿場を宣孝筑紫へ赴き紫式部
 画賛するあつへ石魂録の面影より藍より出く水浅葱染返へ榮る
 せ一言遺籠より説得是了然云へ無理すもあつねど五百羅漢の其
 中必親ふ侶と顔のある比しく年々歳々著述數十部ふ及ぶやふ
 他のすも自の中も肖るものなきてはあはれ扱足下此言を難く未似る
 事を本編綴るを尤りぬいふ何ぞと云ふ授手子と式部お踊の所望
 画賛の詠田畔の池お庭の泉水事を異と入水の覺悟又へなく遇ね父
 名告うるも二度あて是とも蒙求の比事ふ倣ふともあつて金聖難
 所謂正犯るどの文法を博識ゆかて用ふるも非ず都て余倉卒より錯
 實正の言句も出ずと自己より我非を揚榷の使女が言辭より起筆す

五 安政五年午孟春新刻

柳々老入仙果



善のふき
はびくる柿の
木立
伊勢物語
大望の性
枝書



丹生使宣孝徒類大藏胤村
凌轅せらへ寛和元年七月十三日
そ日本紀畧の其由出たり

一条院天皇の御代の
事とせらへ

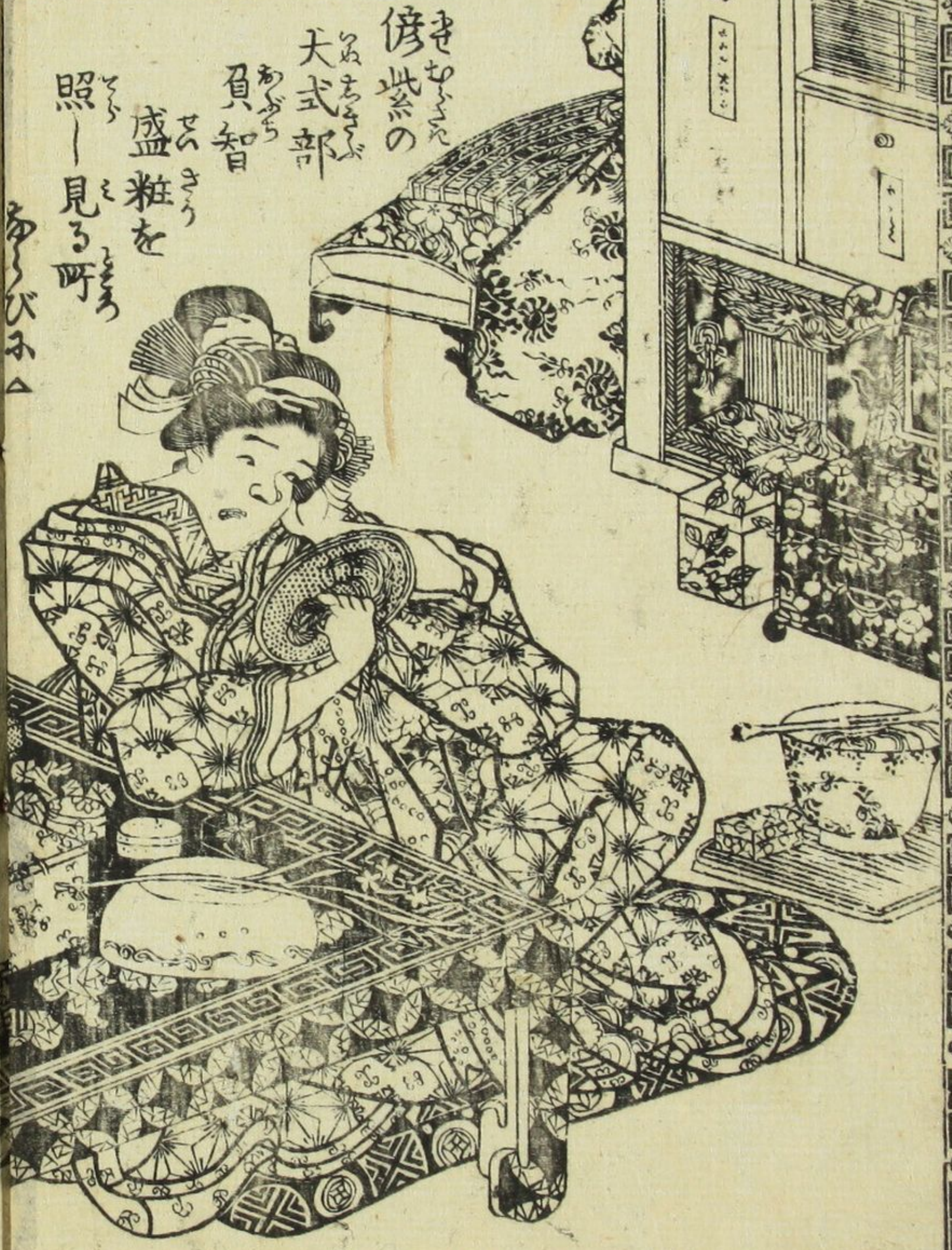
戯作

大和国宇智
郡の大領

大藏種村



種村
紫式部
恋慕
一條の
根も
愚作
る



傍紫の
天式部
負智
盛粧を
照見る所
あびふ△

△紫姐、簪を喫を嗜事
十二編ふ詳る



い、おちのびとあはれとてそのなごう
やこけやもなほまきくゆとお
くへとあづかぬきをたつて
かとうひのるうむつひを
とてのやくそくを▲

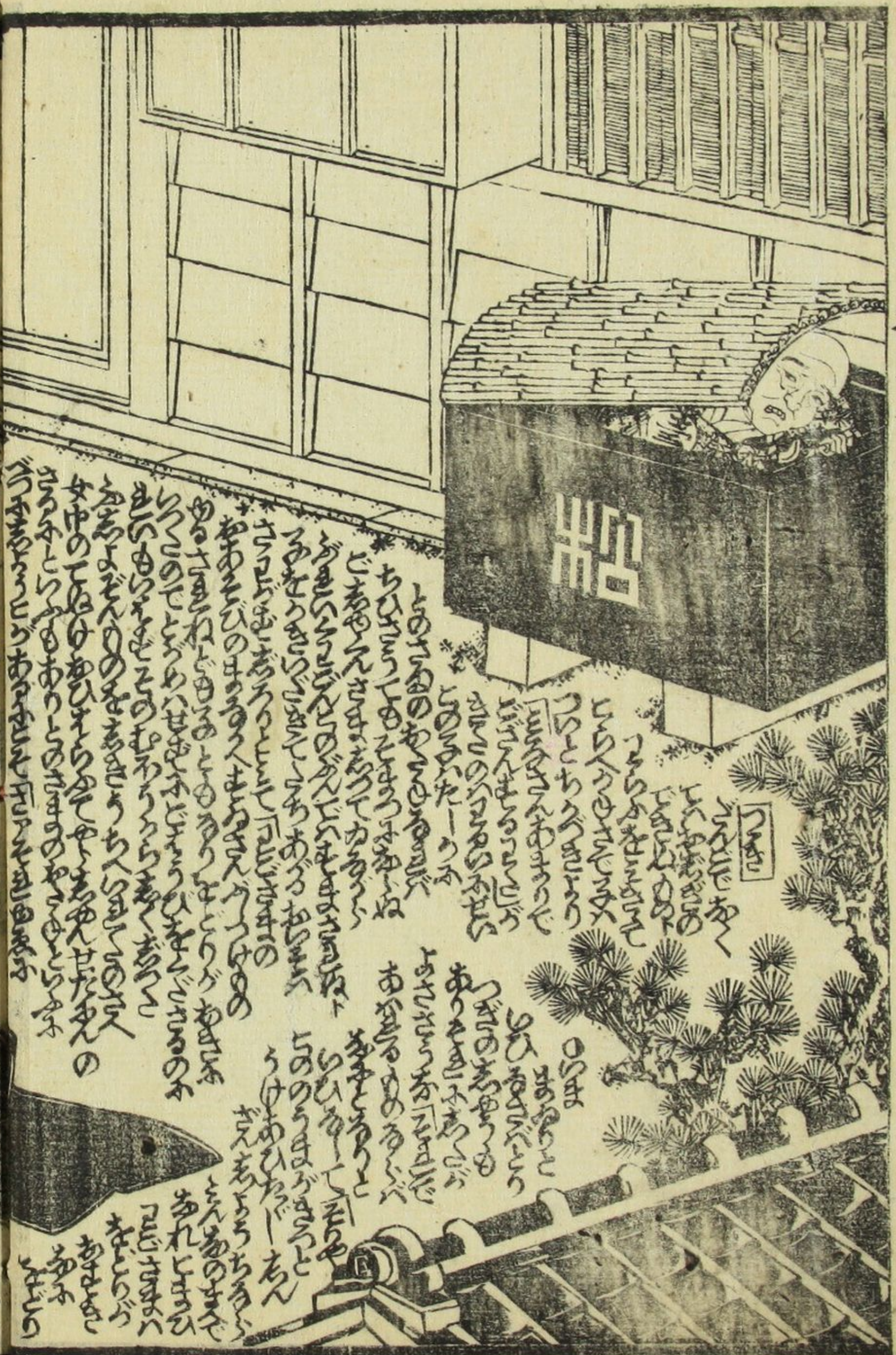
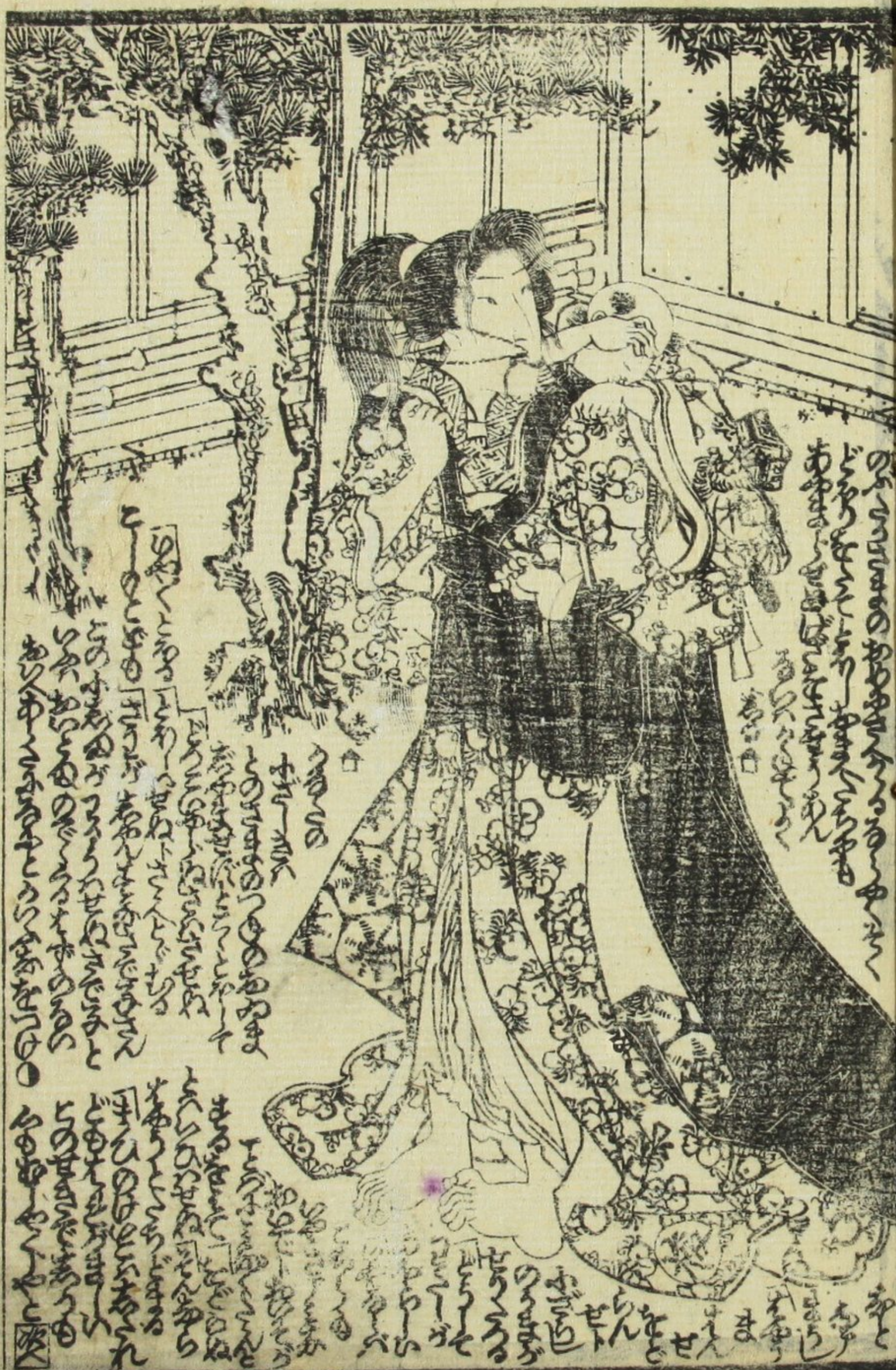
●女中あはれあぢうであかりとあさう
すうさうやてまぬりあぢうすう
あぢやうあぢうもよげあぢうへど
あぢいさるところいさでさうりゆて
ある女中のへやうひさうのまうさうあ
るあうことあういさうとあうあ

さまごふ
 あへんはり
 うひつらひを
 ときてちか
 むのよそふ
 しまるまふ
 わりそこそ
 ひまひま
 あげまふ
 しまつこまを
 まあつら
 こまこま
 あいさつ
 こまてい
 そのちへ
 のもあ
 なまら
 わのへ
 まてあ
 させる
 まらふ
 まらふ

[illegible]

ト。十編。上下市と
あふふを上下と
書あふふりあふふの
ふむりあふふ
たふふ

[illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

國貞画 仙果作



曲亭馬琴作

新編金瓶梅全輯

一篇大尾

為永春水作

黃金水大盡不血

柳亭種彦作

同 女郎花五色石臺

琴聲義人錄

十篇大尾

笠亭仙果作

同 小女郎如怨芋環

根源實業

三篇大尾

柳下亭種員作

柳煙亭種久作

兒雷也豪傑譚

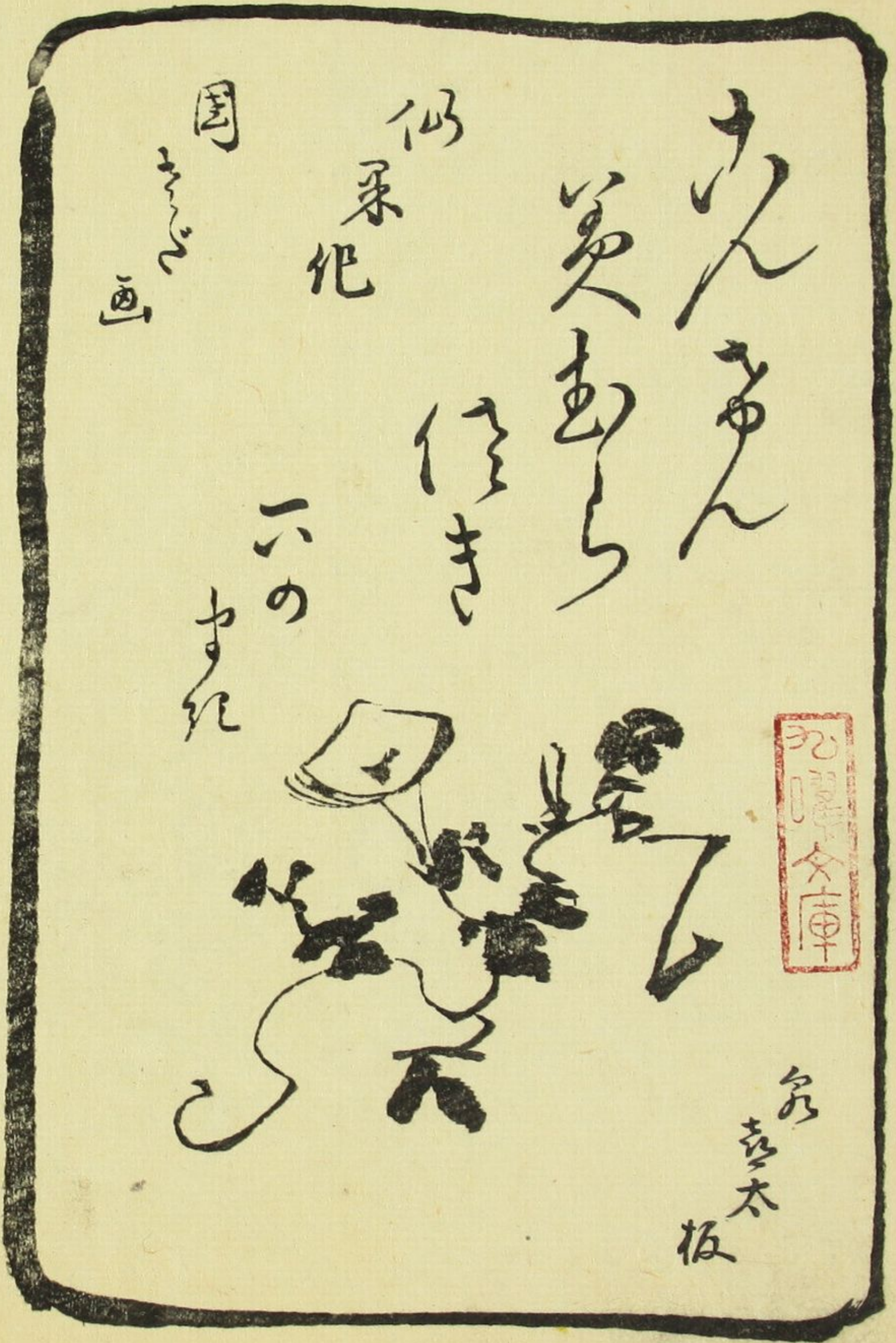
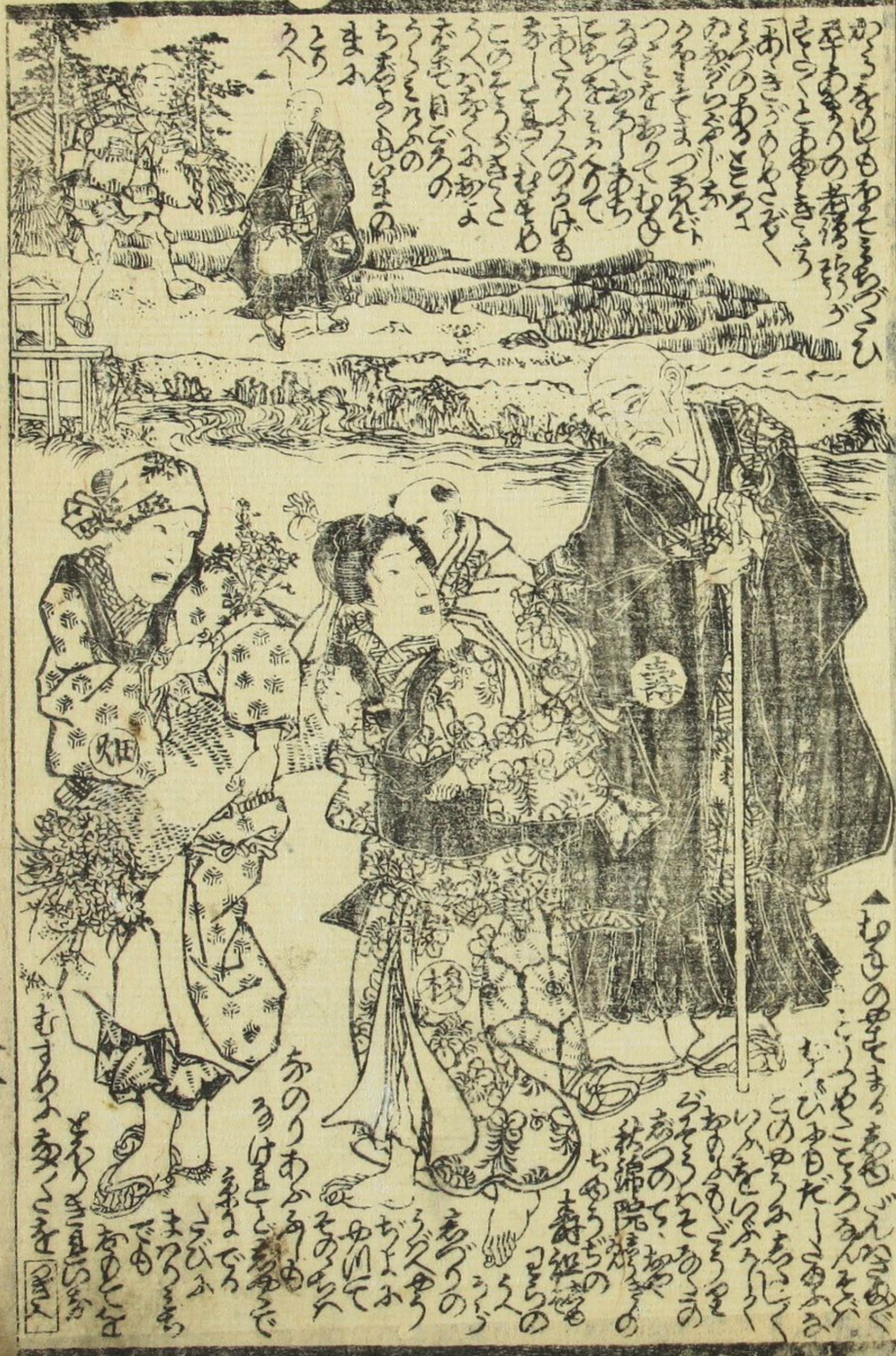
假名 一休草紙

反古

根^え源^{げん}實^み紫^{むらさき}

下の卷十一

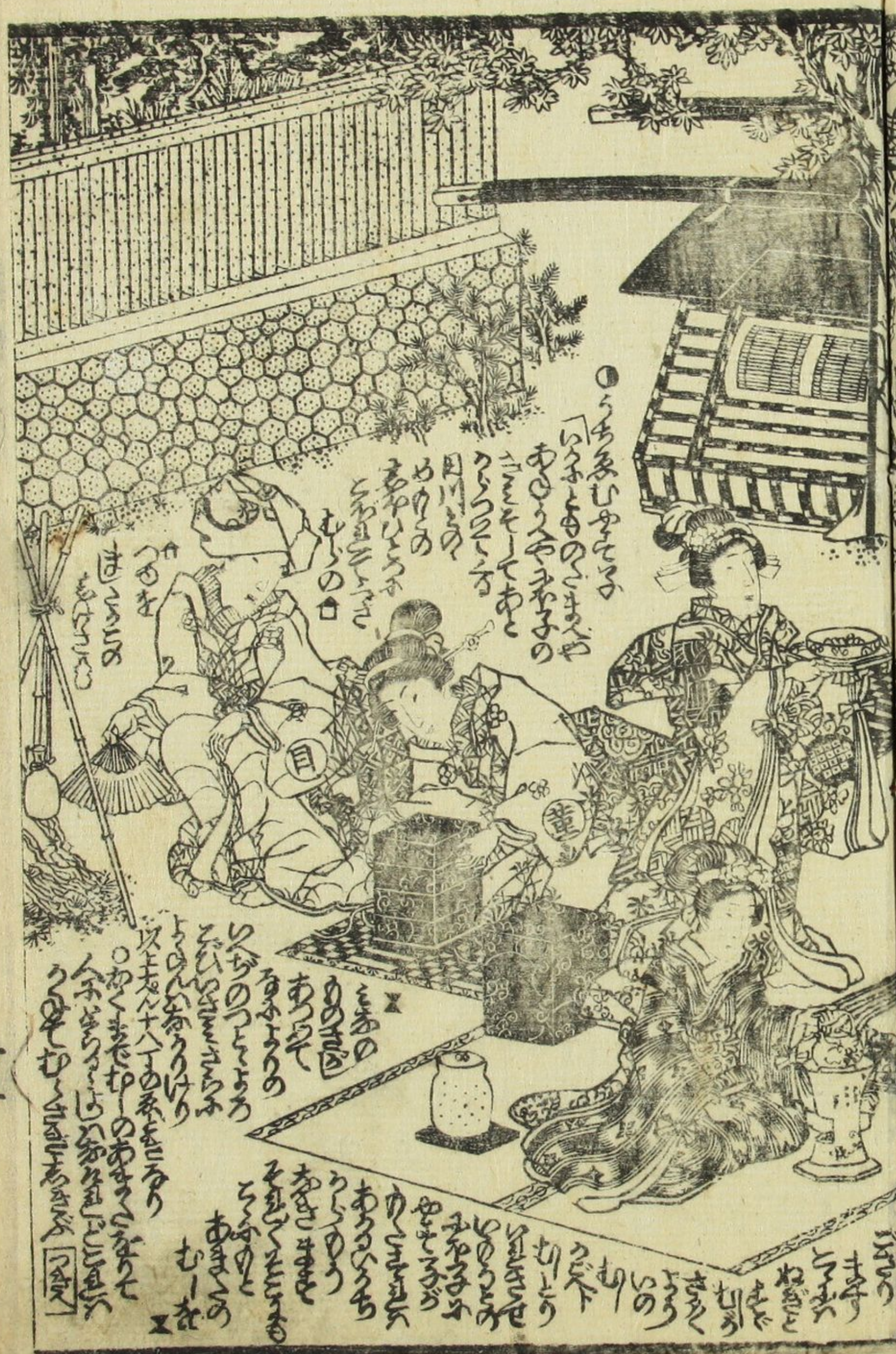






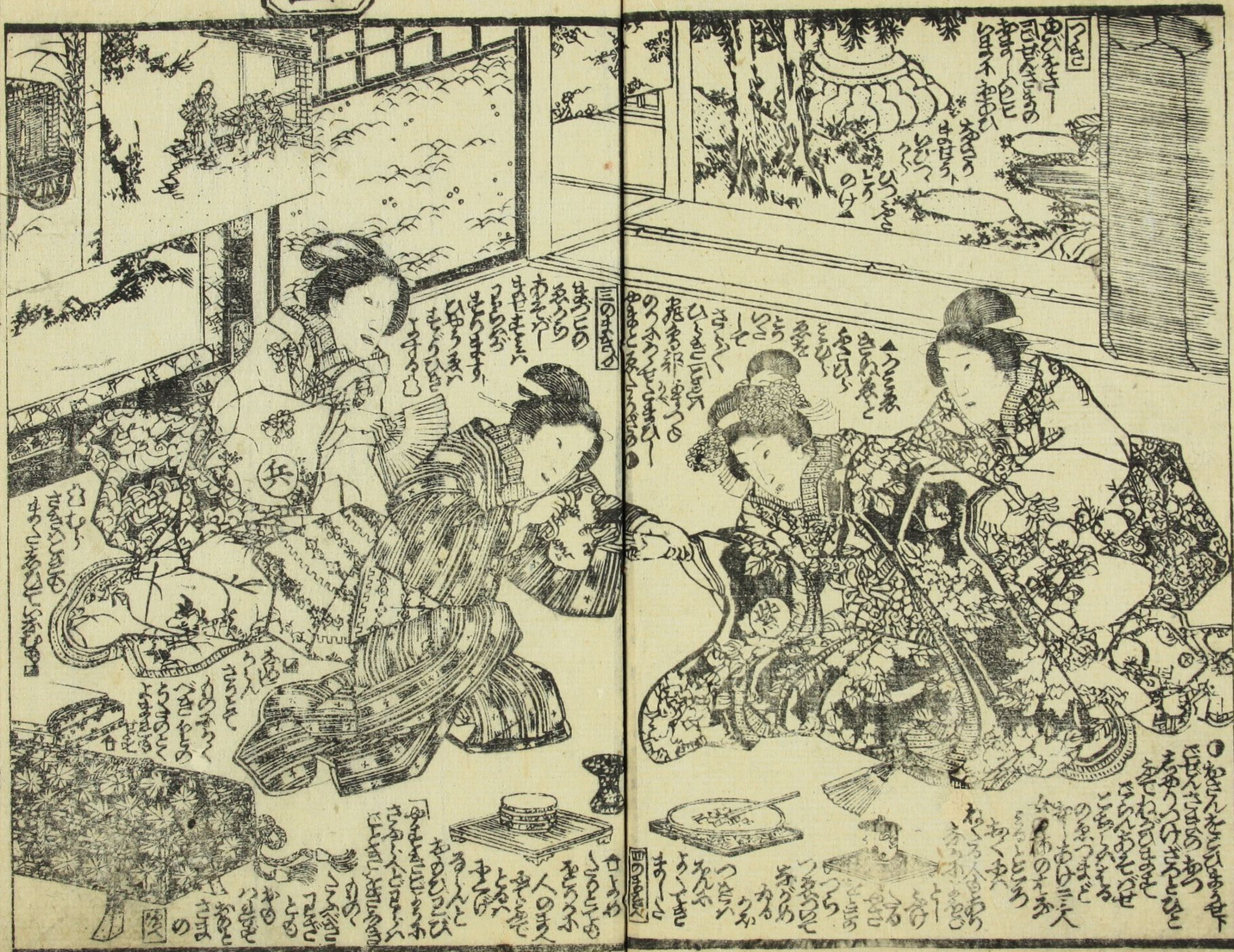
うきとよと
いふことあるや
ふとあるや
のうとあるや
さうとあるや
めいとうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや

うきとよと
いふことあるや
ふとあるや
のうとあるや
さうとあるや
めいとうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや



うきとよと
いふことあるや
ふとあるや
のうとあるや
さうとあるや
めいとうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや

うきとよと
いふことあるや
ふとあるや
のうとあるや
さうとあるや
めいとうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや
さうとあるや







招源

貞園画

種彦作

夢窓

甘芳子

源常
抄

十一篇